

海岸付近の樹木

四日市の場合、海風を強く受ける海岸林は存在しません。しかし、その片鱗をうかがわせる樹木は見られます。ここで紹介する樹木は、内陸部にも生育する種類を含んでいます。



オニグルミは本来山地の渓流沿いに生育するが、種子が堅く海岸に漂着しやすい。上は砂浜で発芽したオニグルミ。雌花(左)は赤く、4月に咲く。



ホルトノキは熊野灘沿岸などに生育する常緑高木。ヤマモモに似るが、紅葉した葉が混じる。花期は7月。鈴鹿川本川河口左岸に植えられている。



シャリンバイはバラ科の常緑低木。本来海岸の崖地に生育するが、市域にあるものは植栽されたものか鳥のフンから発芽したもの。花期は5月。



トベラはトベラ科の常緑低木。右のマサキとともに海岸林を代表する種類。「トベラ-マサキ群集」を構成する。花期は5月。



マサキはニシキギ科の常緑低木。庭に植えられることも多い。花期は6月。



オオバイボタは海岸付近に生える半常緑低木(左、上は果実)。葉脈は表でへこみ、透けて見える。晩秋に黄葉する。



センダンはセンダン科の落葉高木。鳥のフンにより種子が運ばれる。淡紫色の花は5月に咲く。冬芽はオニグルミに似るが、樹皮で識別可能。



ハリエンジュはニセアカシアとも呼ばれる北米原産の落葉高木。防風林に植えられるがクロマツを被圧してしまう。5月に咲く花は蜜源としては重要。



イタチハギは北米原産のマメ科の落葉低木。5月に咲く花には旗弁しかなく、黄色い葯が目立つ。花期は短い。



イヌビワはクワ科の落葉小高木。内陸にもあるが、海岸林の構成要素。イチジクを小さくしたような実をつける。秋の黄葉は透明感があり美しい。



イヌビワの実はいヌビワコバチが受粉し、熟すと食べられる。

イスノキはマンサク科の常緑高木。県下では熊野灘沿岸に自生する。市域のものは植栽されたもの。花期は4月。



砂浜海岸の帰化植物

海岸周辺にもさまざまな帰化植物が侵入しています。吉崎海岸では、ボランティアの手によって漂着ゴミの処理と帰化植物の駆除が行われていますが、多くの労力を必要とします。



ピロードモウズイカは欧州原産のゴマノハグサ科2年草。茎は2m近くまで立ち上がり、黄色い花を初夏から秋に咲かせる(左)。何度も枝分かれした白い毛(上)が全体に密生している。市域では吉崎海岸に多いが、山奥の林道脇にも生える。



コマツヨイグサは北米原産のアカバナ科の2年草。3cmほどの黄色い一日花を咲かせる。繁殖力が旺盛。



ダキバアレチハナガサは南米原産のクマツヅラ科の多年草。高さ1.5mになり、初夏から夏に小さな花を咲かせる(上)。葉は茎を抱く(下)。



シロバナシナガワハギは中央アジア原産の2年草。葉は3枚の小葉からなる。高さ1.2mになり初夏から夏に白い花を咲かせる。



ネズミムギは小花の数が20前後と多く、芒が出る。小花が10以下で芒のないホソムギとの交雑が進んでいて境界が不明瞭。



アツバキミガヨランは北米原産の常緑低木。花茎を含めると2mになる。葉は強固で駆除するのに多くの労力を要する。



シナダレスズメガヤは南アフリカ原産の多年草。法面緑化の目的で導入され、各地に広がっている。別名、ウィーピングラブグラス。



ナヨクサフジは欧州原産の1~2年草。羽状複葉の先は巻きひげとなる。5月頃、青紫色の花を咲かせる。



メマツヨイグサは北米原産の2年草。夏の夜に花を咲かせる。葉には鋸歯が多い。

海岸付近の帰化植物



ベニバナセンブリは欧州からアジア原産のリンドウ科の2年生草本。茎は四角で中空。花期は6～8月。



ノジヤは欧州原産のオミナエシ科の1～2年草。花径1.5mmの淡青紫色の花を春に咲かせる。欧州ではサラダに使う。



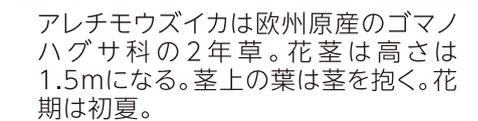
シロバナマンテマは欧州原産のナデシコ科の1～2年草。マンテマ(第3集P39)の変種で、花弁が細い。花期は4月。



クスマツメクサは西アジアから北アフリカ原産の一年草。茎はジグザグ状に伸び、花は2cmと大きい。花期は初夏。



アレチノギクは南米原産の1～2年草。花序の下から横枝が伸び、花序よりも高くなる。花期は夏～秋。



アレチモウズイカは欧州原産のゴマノハグサ科の2年草。花茎は高さは1.5mになる。茎上の葉は茎を抱く。花期は初夏。



アメリカオニアザミは欧州原産の2年草。高さ1.2mになり、茎には鋭いトゲをもつひれがある。花期は7～9月。



カラスムギは欧州から西アジア原産の1年草。小花を包む大きな包穎ほうえいが特徴。花期は春。



ムギクサは欧州から西アジア原産の一年草。オオムギに似るが高さは30cmほど。花期は4～7月。



セイヨウアブラナは一般にアブラナと呼ばれて栽培される。1～2年草。葉や茎はうっすらと白くなる。花期は春。



アカバナリハコベは欧州原産のサクソウ科の小さな1年草。茎は四角く葉は対生する。花期は3～5月。



シロバナセンダングサは暖帯から熱帯に広く分布する1年草。コセンダングサの変種で、4~7の白い舌状花がある。

マメカミツレは豪州原産のキク科の1年草。茎はやや地に伏し、25cmになる。葉は細かく2回羽状に裂ける。花期はほとんど一年中。

マメグンバイナズナは北米原産の2年草。根生葉は羽状複葉になり、ロゼットをつくる。茎につく葉は、大小の深い歯がある。花期は春。



ワルナスビは北米原産の多年草。茎は節ごとに「く」の字に曲がり、鋭いトゲがある。花期は夏~秋。果実は球形。

ヤノネボンテンカは南米原産のアオイ科の落葉木本。高さ70cmになり、花期は8~9月。園芸名は「高砂芙蓉」。

マツバゼリは熱帯アメリカ原産のセリ科の1年草。全株無毛で、セロリーに似た香りがある。葉は2~4回羽状に裂ける。花期は春。



オオフトバムグラは北米原産のアカネ科の1年草。高さ30cmになり、花期は夏。

ハマクマツヅラは北米原産のクマツヅラ科の多年草。茎は四角く1.5mになる。花期は夏~秋。



メリケンガヤツリは熱帯アメリカ原産の多年草。高さ80cmになり、扁平な小穂が球形に集まる。



アレチギシギシは欧亜大陸原産のタデ科の多年草。茎は直立して1.2mになる。ギシギシよりも痩せた感じがする。花は赤味を帯び、階段状に輪生する。花期は夏。

シロイヌナズナは日本にも自生するが、海岸付近にあるものは帰化したもの。アブラナ科の越年生草本。細い茎は高さ30cmになる。花期は3~4月。世界で初めてゲノム全体が解明された植物。

海岸付近の昆虫

海岸付近では、漂着ゴミや海浜植物、海岸近くの林を生活の場に行っている昆虫などが見られます。ここで紹介する昆虫は、内陸部で見られる種類もあります。



ハナムグリは体長17mm。海岸部には本種が圧倒的に多い。幼虫は腐植物を食べ、成虫まで1~2年かかる。



ブチヒゲカメムシは体長15mm。触角は白黒の斑まだら。4~11月に発生。



アカスジカメムシは体長12mm。赤と黒の特徴的な姿は他に間違まちがう種類はない。全国に分布し、セリ科の花に集まる。



ハマベアワフキは体長10mm。全身が淡黄色で斑紋がない。頭から胸部に隆起線がある。5~10月に発生する。



キオビツチバチは体長20mmほど。腹部の黄色斑が特徴。腹部には青紫色の艶つやがある。ハナムグリ類の幼虫を狩る。



アオメアブは体長が27mmあり、初夏から発生し、やや大型の昆虫を捕食する。



ヒゲコガネは体長35mmもある大型のコガネムシ。触角は著しく大きい。幼虫は植物の根を食べ、成虫は夏に発生する。



アメリカネナシカズラの花にきた体長8mmほどのハチの一種。アメリカネナシカズラは北米原産のヒルガオ科の一年生寄生植物。葉緑体がなく、ハマヒルガオやハマゴウなどに絡みつき、養分を吸収する。6~7月に咲く花にはいろいろな昆虫が集まる。



コハンミョウは体長13mm。地面と紛らわしく、すぐに飛ぶので気づきにくい。



ミドリキンバエは緑色の金属光沢がある。



ニクバエの一種は外見上の識別は困難。近年見かける機会はほとんど無くなった。



アオバアリガタハネカクシは体長7mm。上翅は藍色に光る。湿った地上に見られる。体液にはペデリンを含み、皮膚に炎症を起こす。



スキバツリアブは体長12mm。翅の前縁だけが褐色をしている。



フタモンアシナガバチは体長18mmほど。住宅地では激減したが、海岸付近ではまだ見られる。イモムシなどを幼虫の餌とする。



ハラヒシバツタは体長10mm前後。体がやや太い。近似種が多く、ヒシバツタ類の識別は難しい。



ヒロバネカントンは体長13mm前後。淡緑色で、雄の翅は幅広い。リー・リーと区切って鳴く。

漂着ゴミの昆虫



ハマベハサミムシの雌は体長30mm前後。漂着ゴミの下にいて、ヒメハマトビムシなどを捕食していると思われる。

ウミベアカバハネカクシは体長11mm。上翅は赤い。春から夏に漂着物の下で普通に見られる。



テトラポッドの昆虫やクモ



タカノハエトリの雌は体長9mm。触肢は黄色。腹部にある2本の白線は消える個体もある。砂浜にも生息する。



イソハエトリは腹部先端の白い糸いぼが特徴。体長は9mm。コンクリート上に普通に見られる。



夜釣りで釣れた魚に集まってきたウスモンナギサスズの雌。体長は12mm。雄雌ともに翅がない。

海岸付近のチョウ



ウラナミアカシジミ紀南亜種【NT】はウバメガシを食べ、5月下旬から発生する。本来、熊野灘沿岸に生息するので、発生理由は不明。



ムラサキツバメはマテバシイを食べるので、霞ヶ浦緑地などで見られる。ムラサキシジミ(第3集P21)に似るが尾角がある。チョウが止まっているハマヒサカキは植栽だが、本来は海岸の産地に生育する植物。



ハマウドの花を食べるキアゲハ(成虫は第3集P49)の4齢幼虫。ハマボウフウも食べる。

アカメガシワの花芽に産卵するルリシジミ。本種がアカメガシワに産卵するのは珍しい。よく似たヤクシマルリシジミも分布を北上させていて、出現する可能性がある所以需要。



人と海との接点 干潟

潮が引いて現れる陸地を干潟と呼びます。特に春の大潮の干潮はよく潮が引くので、潮干狩りを楽しみにしていた人たちが多く訪れます。しかし、貧栄養化など海の水質の変化の影響をまともに受ける干潟の環境は年々変化していきます。2017年と2018年は一時的にハマグリが大発生しましたが、2020年の段階ではイソシジミですら死殻が目立つようになり、ほとんど空のバケツで帰っていく人が増えました。



休日を干潟で過ごす親子連れ。貝が獲れなくても、ヤドカリやカニを捕まえるなど子どもたちの情操教育に欠かすことのできない貴重な体験をする場となる。



春の大潮の日、磯津漁港での満潮(左)と干潮(右)の景観。潮位差は最大3m近くになる。潮は大潮の前半よりも大潮の後半からその後の中潮の方がよく引く。

干潟の貝類



アサリとハマグリ【NT】の収穫物。獲れた時期はバケツはいっぱいになった。



水管を伸ばすアサリたち。見ていると楽しい。



ハマグリ【NT】(上)とアサリ(左)の殻の色や模様の違い。両種とも実に個性的。成長の途中で模様が変わってしまう個体もいる。模様が変異することの原因はよく解っていない。



オオノガイは殻長10cmになる大型の二枚貝。砂泥質の干潟に30cmの深さに潜っている。食用になるおいしい貝だが、近年生きた個体を見ることはほとんど無くなった。



干潟の生物を調べる25cm×25cmの枠。この中の砂をふるいにかける。



左の枠内から出てきた50個のイソシジミ。別名はシシビ。ほぼ、ぎっしりと貝で埋め尽くされた状態。撮影は2015年5月の高松海岸。



夜になり水管を伸ばすイソシジミ。水管の長さは殻長の5倍にもなる。



オチバガイ【NT】は一時姿を消して、2015年頃より増えて、現在はまた減っている。外帯の反対側から足が出る。



フチバガイは波が直接当たらないような場所に見られる。近年減少傾向。



フトヘナタリは潮間帯の上部の干潟に生息する。長時間干出する環境を好む。



南五味塚の干潟を埋め尽くすホソウミニナ。かつて本種は汽水域の狭い範囲にしか生息しなかったが、近年の海水の水質の変化などの影響を受け、分布を広げている。



ウミニナ(左)とホソウミニナ(右)。ウミニナの方がかなり太い。左上の個体は白帯のあるタイプ。ホソウミニナにも白帯のあるタイプがいる。



ヘナタリは泥質の干潟を好むので、市域では非常に少ない。殻口が左に張り出す。

フトヘナタリの幼貝は螺塔の先端までであるが、成貝になると先端は欠ける。



バカガイは殻長が8cmになる食用の貝。砂質を好む。むき身はアオヤギと呼ばれる。放射条線のある個体とない個体がいる。幼貝(上)は全く色合いが違い、別種に見える。幼貝は砂に潜るのが速い。



シオフキの成貝(左)と幼貝(右)。本種は普通食用とはしない。砂泥質の干潟を好み、アサリを掘る時にごろごろ出てきて、邪魔者扱いされていたが、近年では激減している。



ソトオリガイは真珠光沢のある薄い殻の二枚貝。水管は太く長い。砂泥質を好むので、近年は激減している。



アラムシロは干潟のお掃除屋さん。砂泥質の干潟を好み、水管を伸ばしながら死肉に集まってくる。近年減少が著しい。



オキシジミは殻長5cm。砂泥質から砂質を好む。殻は紫色を帯び、水管はオレンジ色をしている。



ツメガイは干潟の内部を潜航し、他の貝に穴を開け、肉を食べる。



サキグロタマツメタも他の貝を捕食するので問題視されたが、近年は餌の貝自体がないのでほとんど見られない。



マテガイ(上)は殻長12cm。礫の混ざらない砂質を好む。涙形の穴(左)に塩を入れると反射的に飛び出してくる(右)。マテ掘りはとても面白いので、子どもたちに体験させたいが、いつまで獲れるか非常に心配。



ヒメアサリは外洋に面した干潟に生息する。アサリに似るが、色の変異は少ない。2017年から見られるようになった。



ヒメアサリの内面は橙色や黄色を帯び、白いアサリと区別できる。



サルボウは^{みくすう}肋数が32本前後。海岸に死殻はたくさん落ちているが、生貝に出会う可能性は極めて低い。



クレハガイ【NT】は殻高2cmのイトカケガイ科の非常に珍しい巻貝。



バイ【NT】は殻高6cm。食用として重要な貝。1990年頃、船底汚濁防止剤に使われた有機スズ化合物が環境ホルモンとなり激減した。



ユウシオガイは殻長2cmの小型の二枚貝。写真の状態から10秒で完全に砂に潜る達人。砂泥質を好むので、近年はほぼ見られない。



ミヤコドリ【NT】は殻長1.2cm。干潟に埋もれた転石裏の還元環境に生息する。近年、確認できない。



イボキサゴ【CR】は殻径2cm。砂に半分体を潜らせて進む。市域での記録はあるが、ほぼ見られない。



ホトギスガイは一時干潟を埋め尽くすほど増え、スズガモなどの絶好の餌になっていたが、近年ではほとんど消失した。

汽水性の貝類

河川からの淡水と海の海水が入り混じる汽水域には、カワザンショウガイやイシマキガイなどが生息しています。これらの種類はこうした特殊な環境でしか生きていけません。小さくて識別は難しいですが、絶滅が心配される貴重な種類も含まれています。



ヒロクチカノコ【NT】は殻長1.5cm。殻口が広く蓋がある。ヨシ原の流木の下にすることが多い。個体数は非常に少ない。

イシマキガイは殻長2cmあり、殻頂部は溶けている。河口域から河川を遡上する。水槽の掃除用に市販されている。



キヌカツギハマシノミガイ【EN】は殻長10mmの卵形。有肺亜綱に属し、軟体はカタツムリに似る。3~5本の黒褐色帯がある。鈴鹿川派川河口で1個体のみ確認された。

カノコガイ【NT】は殻長1.5cmになり、イシマキガイによく似ている。左右の写真のように色変異がある。本来、南方に多い種で、市域には近年侵入してきたと思われる。



ヤマトシジミは汽水域の砂地に潜っている。黒く艶があり、市販されているシジミはほとんどが本種。朝明川河口や鈴鹿川本川河口ではほとんど獲れなくなった。

カワザンショウガイは殻長が8mm。褐色の3本の色帯がある。殻頂部は溶けていることが多い。



オカミミガイ【VU】の成貝(上)と歩く幼貝(左)。殻長は4cm。有肺亜綱に属している。鈴鹿川派川河口に生息するが、生息範囲は極めて狭く、個体数も少ない。カニの穴や流木の下にいる。



ヒナタムシヤドリカワザンショウ【NT】は殻長4mm。殻は橙褐色で光沢がある。縫合の下と殻底部がクリーム色なのが特徴。



クワイロカワザンショウは殻長5mm。縫合の下にある細い溝が特徴。

ヘソカドガイは殻長5mm。殻口に臍孔を塞ぐように角がある。

ヒラドカワザンショウは殻長8mmの大型種。カワザンショウガイに似るが、螺塔が直線的。



ミドリシャミセンガイ

コラム 生きた化石 ミドリシャミセンガイ

ミドリシャミセンガイは名前に「ガイ」とあり、二枚貝の仲間のようにも見えますが、全く異なる触手動物門、腕足綱に属します。この仲間の化石は、カンブリア紀から現在まで出ています。緑色をした殻の長さは4cmになり、砂泥底に埋没して殻の先端だけを海底に出して生活しています。有明海沿岸ではみそ汁の具材として売られていますが、足のような部分は硬く、軟体部も毛のようなものがあってお世辞にもおいしいとは言えません。

海が荒れた後に漂着しますが、有機物を多く含む生活排水が流れ込む海域に限って生息しています。レッドリストにも載っていませんが、この珍しい生物が私たちの世代で消えてしまわないことを切に願います。

干潟の生き物

干潟には不思議な生き物がたくさん生息しています。そこには驚きや発見が詰まっています。ここでは貝類やカニ類以外の種類を紹介します。



ニホンスナモグリが砂を押し出して、小さな火山のような光景ができた。



この水風船のようなものは、ゴカイ類の卵のう。春に見られる。



イトゴカイの一種は長さ1m以上になる細長い環形動物。これで1個体。



コムシは体長10cmの環形動物。釣りの餌に使われる。



チロリ的一种は、4つの牙が付いた吻を出して小動物を食べる。



スゴカイイソメは体長30cmになり、貝殻や海藻を付けた管の先を干潟の上に出している。



ヨコエビの一種は体長1cm。種類が多く同定は困難。シギ類の餌として重要だが激減している。



ヒメハマトビムシは体長1cmの節足動物。漂着したゴミを食べる掃除屋さん。水に入ることを嫌う。



サンショウウ二は殻径4cmの棘皮動物の仲間。体の上に砂粒を乗せている。



イシコは体長8cmのナマコに近い棘皮動物の仲間。管足は2~4列ある。



イソコツブムシの一種は体長7mmの節足動物。近似種が多く、同定は困難。石の下などに多い。



ニセスナホリムシは体長1cmの節足動物。他の動物の死体などを食べる。



ハマダンゴムシは体長12mmで、体を丸めることができる。漂着した海藻などを食べる。



ウミナナフシの一種は体長12mmほどの節足動物の仲間。砂泥干潟に巣穴を掘って生息する。



ヒラムシの一種は扁形動物門に属する。プラナリア(第2集P22)に近縁。裏返しても体を波打たせて起き上がる姿は一見に値する。



クモヒトデの一種はよく似た種類が多く、同定は難しい。



スジホシムシの一種は体長15cmほど。星口動物門に属する。体の先端から陥入吻(写真左下の赤紫色の部分)を出し入れする。



アキアミは体長3cmほど。サクラエビに近縁。長い触角が途中で折れ曲がる。魚やシギ類の大切な餌だが、近年はほとんど発生しない。



ミズヒキゴカイは体長3~10cm。泥干潟に生息する。多数の感触糸を出す。



ボラの子はハクと呼ばれ、早春から干潟に大群で現れる。上げ潮に乗って干潟に殺到し、泥の中の有機物やプランクトンを食べる。干潟の砂礫質化が進む原動力になっている。ボラが泥を食べつくして減少に転じた時、マゴチやヒラメなど魚食性の魚やミサゴが減少すると予想される。



イシガレイの幼魚も干潟で見られる。砂と非常に紛らわしい。



イソミミズは長さ4cm程度の環形動物。陸生のミミズとよく似ているが、潮間帯上部の砂の中にすむ。



カワゴカイの一種は泥質干潟に生息し、粒状有機物(デトリタス)やプランクトンを食べている。本種はかつて1平方メートル当たり3000個体も生息し、シギ・チドリや魚などの大切な餌になっていたが、近年ではほとんど見られなくなった。漁業不振や生物の減少を如実に物語るバロメーターという事ができる。



マゴチの幼魚は尾の白黒斑が特徴。



ヒダビルはスズキやフグなどの大型の魚に外部寄生する。長さが10cmになる環形動物の仲間。

干潟の甲殻類

春から秋の干潟は、カニ類やエビ類などの甲殻類で賑やかになります。しかし、彼らは環境の変化に非常に敏感で、底質が少しでも変わると姿を急に消してしまう種類もあります。



チゴガニは甲幅が10mmの小型のカニ。河口の砂泥質干潟にのみ生息する。口の周囲の水色とハサミの白色が目立つ。干潟一面のカニがリズムを合わせてハサミを振り上げる光景(右)は見ていて楽しい。かつては何万個体の大群が見られたが、近年は数百個体のレベルまで減っている。



ヤマトオサガニは甲幅35mmあり、河口の泥質干潟にのみ見られる。右上は雄、右中は雌。上はハサミを振り上げてウェービングする老成雄。右下は長い眼だけを水中から潜望鏡のように出して辺りを伺う様子。近年減少が著しい。



モクズガニは甲幅75mmになる大型のカニでハサミに軟毛が密生する(左上)。春と秋に別個体群が繁殖のために川を下る。左下はおおよそ数万個の卵を抱卵した雌。海にゾエア幼生を放出したのち2回目の産卵をする個体もいる。大きな雌は放仔後死ぬ。右は河川を遡上する幼カニの群れ。垂直の壁も登れる。食用にもなるが、肺吸虫の第2宿主なので注意が必要。



アミメキンセンガニは甲幅35mmあり、河口の砂地にいる。扁平な脚で巧みに砂に潜る。



コメツキガニは甲幅10mmで、砂質干潟のみに生息する。甲は砂と紛らわしい(右下)。左はハサミを持ち上げてウェービングする雄。下面は赤紫色が美しい。右上は巣穴と砂団子。大きな塊は巣穴を掘ったもの、小さな団子は餌を食べた跡。近年干潟の砂礫質化が進み、最も減少した種類。



ハクセンシオマネキ【VU】は甲幅25mmになり、雄の左右どちらかのハサミは巨大になる。左上はその大きなハサミをいっぱいに広げてウェービングする雄。上は隣の雄とケンカする雄。やはりハサミは大きな方が有利になる。左下の雌は両方のハサミが小さいので砂に付着した有機物を食べるのに有利。本種は砂泥質干潟が固くなった環境を好み、2010年頃から侵入してきた生物。



カクベンケイガニは甲幅25mmになり、甲はほぼ四角形をしていて前側縁に切れ込みは無い。石積の隙間を好み、近年増加傾向にある。



アシハラガニは甲幅35mmになり、河口干潟に穴を掘り、群生する。体は灰緑色を帯びハサミの先は淡黄色。前側縁には切れ込みが2つある(上左)。雄は眼窩下縁の顆粒とハサミ脚をこすり合わせて発音する。上中は交尾をしているところ。上右はハクセンシオマネキの雌を突然襲って口の周囲から食べ始めた。隣人が襲ってくるとは、カニの世界も厳しい。



ヒメアシハラガニは甲幅25mmと小さく、前側縁の一番上の歯はまっすぐ前を向く。肉食性はアシハラガニよりも強い。近年増加傾向。



ベンケイガニは甲幅30mmになり、アカテガニと間違われやすいが、前側縁に切れ込みが1つある。個体数は多くない。



クシテガニ【NT】は甲幅28mmになる。ハサミは指先が濃い赤色。ハサミの可動指に7~9の顆粒^{かりゅう}がある。口の上の八の字形の白斑が目立つ。他のカニを襲って食べることもある。

ハマガニ(右上)は甲幅50mmになる大型種。レッドリストからは削除されたが、希少な種類。潮上帯に大きな穴を掘る。甲の中央に溝があり、ハサミは紫色やオレンジ色を帯びる。昼間に活動することもあるが、主に夜行性。植物食で、ヨシの葉や茎を食べる。威嚇する時(右下)は、ハサミをいっぱい広げる。



ユビアカベンケイガニは甲幅20mm。ハサミは先まで赤く、可動指に22個前後の顆粒^{かりゅう}列がある。潮上線付近の流木などの下に見られる。



オサガニ【NT】は甲幅40mm。甲が著しく横に長い。砂質の干潟を好み、砂に潜る。近年激減しており、成体を見る機会はほとんどない。



フタバカクガニは甲幅30mm。前側縁には2つの歯が明瞭。ハサミは黄色を帯び、可動指に8~12の顆粒がある。石積みと泥地が両方ある環境を好む。



ウモレベンケイガニ【NT】は甲幅24mm。全身に短毛があり、それに泥が付いていて泥の塊のように見える。ほとんど動かない。個体数は非常に少ない。



シオマネキ【EN】は甲幅35mm。写真は雌だが、雄の片方のハサミは巨大になる。2016年に鈴鹿川派川で記録された。海流により幼生が運ばれた一時的な発生と思われる。



スナガニの巣穴と足跡。巣穴はほぼ垂直に直径の20倍ほどの深さがある。近年、ミナミスナガニ、ナンヨウスナガニ、ツノメガニが分布を広げているので、捕獲しないと識別は難しい。



スナガニは甲幅30mm。潮上線より上の砂浜に巣穴を掘る。主に夜行性で、砂浜を活発に走り回り、小動物などを食べる。繁殖期の夏には赤くなる個体がいる(上)。近似種とは甲の下部にある1対の淡色斑が識別点になる(左↑)。



ウモレマメガニ【VU】は甲幅10mm。全体に軟毛がある。アナジャコやニホンスナモグリ^{スナモグリ}の巣穴で生活していると考えられる。



タカノケフサイソガニは甲幅30mm。ケフサイソガニから分けられた。口の周囲や腹部に斑点がない(上中)。雄のハサミには毛があり、外側の毛が内側より多い。河口のカキ殻や石の下に多い。甲の色彩には変異が多い(上右)。



ケフサイソガニは甲幅30mm。口の周囲や腹部に斑点がある(上右)。雄のハサミは内側の毛が外側より多い。若い雄や雌のハサミには毛がない。

マメコブシガニは甲幅20mmになり、甲らは丸く固い。目はとても小さい。砂質干潟の滯筋^{しみず}にいて縦に歩く。初夏には雌を抱いた雄を見かける。



アリアケモドキは甲幅15mm。レッドリストからは除外されたが、多い種類ではない。六角形をした甲面を左右に稜線^{りょうせん}が走るのが特徴。腹部(右)は赤色をしている。干潟の滯筋^{しみず}に生息する。



オオシロピンノは甲幅15mm。アサリやマガキ、ムラサキガイなどの中で生活する。メガロパ幼生から変態した稚ガニが歩いて貝の中に入る。



ガザミは甲幅18cmになり、重要な水産資源。ハサミの力は強力なので、へたに捕まえようとするとき怪我をする。ハサミ脚の長節には4本のトゲがある。甲幅2cmほどの幼体(左)は干潟に見られ、模様の変異がある。



タイラギカクレエビは体長15mm。タイラギ(P34)の外套腔がいどうくうの中で生活している。非常に珍しい種類。写真は左側が雌。



ほうし
放仔に来たクロベンケイガニ(右中央)。甲幅は40mmになり、口の周囲やハサミ脚の紫色が目立つ。河口から河川下流に巣穴を掘る。抱卵期間は20日前後。初夏から夏の大潮満潮に合わせて放仔する。放仔は、水に入り腹を拡げて振ると卵膜を破ってゾエア幼生が水中に放たれる。8月上旬の撮影日では、アシハラガニ(右奥)、アカテガニ(右手前)にフタバカクガニを加えて、4種のカニの合同放仔となった。



アカテガニは甲幅35mm。ハサミ脚は赤いが先は白っぽい。前側縁に切れ込みはない。甲の色は変異があり、青灰色(左)の個体もある。放仔の時以外は堤防の内側に穴を掘って生活するので、堤防強化工事によって海と遮断され、著しく減少している。



コラム カニの脱皮



クロベンケイガニの脱皮殻

ヒトなどの脊椎動物せきついは内骨格をもち、骨格が中であって周囲を筋肉や皮膚が覆う構造をしています。これに対して、カニや昆虫などの節足動物は、外骨格というスタイルを取っています。体の表面を殻で覆い、筋肉や内臓はその中に入っています。外骨格の場合、成長に合わせて脱皮する必要があります。左の写真を見て、「カニが死んでいる」という子どもがいますが、これは脱皮殻なのです。

カニの場合、稚ガニで10日に1回ほど、成体でも年に3回ほどの脱皮をします。脱皮は水中でしかできず、脱皮直後は体が柔らかくなるので外敵に襲われる危険も増します。また、脱皮に失敗する可能性もあります。

このように脱皮は不利な条件ばかりのようですが、他の動物食性のカニなどに襲われたりして失った脚やハサミ脚を再生するという裏技でもあるのです。



エビジャコ的一种は全長2.5cmになり、体はやや^へ平。砂質の干潟に見られ、砂と紛らわしい。

ニホンスナモグリは全長5cmになり、砂質の干潟から浅海に50cmほどの巣穴を掘ってすんでいる。左右のハサミ脚はどちらかが大きい。釣りの餌としてはボケと呼ばれ、チヌ釣りなどに使われる。



ヒラテナガエビは体長9cmになる。河川の下流域に少数生息する。テナガエビに似るがハサミが平たく、第3腹節などに暗色帯がある。写真は雌。



テッポウエビは体長5cmになり、砂泥質の干潟や浅海に巣穴を掘って²番で生活する。左右どちらかの第1脚が大きく、パチンと鋭い音を出す。



イソテッポウエビの一种は体長4cmほど。磯から干潟まで生息し、まだ分類が確立していない。



ハサミシャコエビは全長5cm。砂泥質干潟に巣穴を掘り、掘った泥を盛り上げる。個体数は少ない。



ユビナガホンヤドカリは内湾の代表的な小型のヤドカリ。指節が前節よりも長い。



アナジャコは体長9cmになる。砂泥質の干潟に深さ1m以上の巣穴を掘って生息する。巣穴の内面は塗り固めたように滑らか。穴の中では(右)、体を折り曲げて器用に方向転換することができる。釣りの餌として重要。干潟の砂礫質化で減少している。



コブヨコバサミは脚にオレンジ色の線が入るのが特徴。大型のヤドカリでアカニシヤツメタガイに入る。



テナガエビは体長9cmあり、雄のハサミ脚は非常に長くなり、ハサミ部に毛がある。汽水域から河川の下流部に生息し、主に夜間に活動する。釣りの対象としても人気がある。



ユビナガスジエビは体長4cmなり、額角はほぼまっすぐ。汽水域のカキ殻や転石のある場所に多い。雄や未熟な個体は透明に近いが、抱卵した雌は黒褐色になる。

テトラポッド周辺の生き物

伊勢湾周辺は本来、砂浜の海岸しかありません。そこへ護岸のためにテトラポッドが入れられると、岩場環境が人工的にできます。マガキや海藻が付くと、いろいろな生物の格好の隠れ場所や生活場所になります。



鈴鹿川派川河口のテトラポッド。干潟とはまた違う生物が見られる。



イソガニは甲幅30mm。テトラポッドのカキ殻の隙間を好む。ハサミに紫色の斑点があり、歩脚に横縞がある。雄のハサミのつけ根は袋状。



ヒライソガニ(上、右上、右)は甲幅25mm。色の変異が多い。小さな個体には真っ白もいる。名前の通り甲は平たい。テトラポッドよりも波が当たる転石の下を好む。



イトマキヒトデ(左)は青緑色の地に橙赤色の不規則な斑紋があつて、間違ふ種類はない。全体の幅は10cm。本来、外洋の岩礁に生息するが、市域にも侵入している。飼育は簡単で、管足(左下)を出して貝や魚を捕え、胃袋を外に出して食べる様子が観察できる。



ナミイソカイメンは黄緑色か淡緑色。海綿動物門に属する。各地の潮間帯に普通。



ダイダイイソカイメンは橙色をしており、高い突出部の先に出水孔が開いている。



フナムシは動きがゴキブリに似るので嫌われるが、よく見ると青い斑点があり意外にきれい。発育段階ごとに群れをつくり行進する。近似種に触角の短いキタフナムシがいる。



カラマツガイと黄色い指輪状の卵塊。有肺類に属する。本種は外洋の磯に生息し、以前は見られなかった種類。



イボニシに食べられたと思われるカラマツガイの死殻。カラマツガイのようなカサガイ類は、イボニシが乗ってくると外套膜を上げて振り落とそうとする。